

---

# ソードマギカ＋オンライン

椎名咲良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソードマギカオンライン

### 【NNコード】

NN8800NN

### 【作者名】

椎名咲良

### 【あらすじ】

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは現実世界での“死”を意味する。

VR技術を用いた世界初のMMO『ソードマギカ・オンライン（SMO）』のオープン テストに参加した約二万人のユーザーと共にその過酷な戦いが幕を開けた。妹と共にSMOに参加していた主人公、サクヤは妹のフウカと共に何とかこの世界から脱出すべくいち早く運命を受け入れる。

そして、ゲームの舞台となる魔法と剣が支配する異世界の中央に位置する世界樹の最上階にあるとされる《楽園》を目指す攻略最前線

で戦うコンビとして頭角を表していった。

『樂園』到達を目指して日々熾烈な戦いを続けるサクヤ達だが、ひょんな事からウィザードの頂点と尊られる女魔導師ユキナとチームを組む事になり――！

プリスティア・リュミレス

## † プロローグ † (前書き)

定番物もいいところの定番です。初の王道? ファンタジーになります。  
そこまで高いクオリティではないですが、楽しんでいただけると嬉しいです。

# 十 プロローグ 十

無限に広がる広大な大地。この世界でしか見る事が出来ない景色だ。

どのくらい広いのか計つてみようと考えた観測スキルを持つた醉狂な一団が三ヶ月にも渡る調査を行つた結果、面積はおよそ一千五百平方キロメートルという事がわかつた。

地球最大の大陸であるコーラシア大陸が五千四百九十二平方キロメートルなのだから、その総データ量は推し量れない。

大地の各所にはいくつかの大都市と小規模な街や村、森や洞窟、海に湖が存在する。

そして、世界の中心に位置する《世界樹》。

内部は迷宮になつており、百階まであるとされている。

その頂上に到達し、そこに存在するとされる《楽園》で魔物を封印する事がプレイヤーの目的となる。

その世界の名前はプリスティア・リュミース。

そのゲームの名は ソードマギカ・オンライン。

紅蓮の輝きを放つ閃光  
が突進して来る。

漆黒のコートを身に纏う黒髪の少年 サクヤはその閃光が肩に当たった事に舌打ちすると、視界の左上に表示された青色の細い横線に視線を向ける。

その横線 HPバーはサクヤの生命の残量を視覚化したものだ。まだ八割近い数値が残っているが、油断は出来ない。目の前に立つ二体の大型エネミーからモロに攻撃を貰えば、一瞬で全損する可能性も大いに有り得るからだ。

操られたウイザード『レベル72』が再び詠唱を開始しようと杖を構えた瞬間、サクヤの数メートル後方に立つ淡い水色のロープを身に纏う少女から放たれた滑らかなソプラノボイスが薄暗い迷宮に木霊する。

「《サイレス》！」

魔法。  
マギカ

いくつかのキーワードを詠唱という形で口ずさみ、HPバーの下に表示された緑色の細い横線 MPバーを消費する事で発動する神秘の力。

今発動した《サイレス》は、対象の魔法を一定時間使用禁止にする能力弱体化魔法効果を持つた魔法だ。

その効果を受けて詠唱が出来なくなつたウイザードはもはや、ただの的以外の何者でもない。

「《シルフィード》！」

直後、サクヤの身体を風が包み、サクヤは自分自身の身体が急激に軽くなるのを感じた。

《シルフィード》は風属性の補助魔法<sup>バフ</sup>で、使用者の移動速度を一定時間だけ速くする効果を持ち、尚且つ詠唱が必要ないサクヤのお気に入りの魔法だ。

「つ！」

足に力を入れて地面を蹴ると、その驚異的なスピードで前衛の操られたソードマスター《レベル73》の横を駆け抜けて一気に無防備なその懷に飛び込むと、その手に握られた漆黒の刃が黒光りする。このゲームの最大の特徴。それは、魔法と剣技が融合したスキル

魔法剣技<sup>ソードマギカ</sup>の存在にある。

この世界の魔物 エネミー達は魔法を使わなければ倒す事が出来ない。

魔法を主とするウイザードは素直に魔法で倒せばいいのだが、剣を主とするソードマスターはそうはいかない。

ウイザードは剣技の取得が、ソードマスターは魔法の取得条件が厳しいのが原因に上げられる。そこで、ソードマスターも敵を倒せる様にと考案されたのが魔法の力を持つた剣技 ソードマギカな訳だ。

「《ブラック・ロータス》！」

闇属性魔法と融合した高速連撃、《ブラック・ロータス》が炸裂する。

漆黒の刀身の黒光りするライトエフェクトはソードマギカが発動

している証。発動し、照準さえ合わせれば、後はシステム側がスクリに設定された動きを再現する。

その効果は射程範囲に入っているエネミーを一体でも複数でも高速連撃で切り刻む。名前の通り、一回斬る度に刀身から散つて行く黒のライトエフェクトが散りゆく黒い薔薇の花びらを感じさせる。

「トドメ……だッ！」

最後に有りつたけの力を込めてウィザードを真つ一つに両断する。その一撃で、ウィザードの頭上に表示される微かに残っていたHPバーが一ドットも残さず消滅し、その身体を作成するプログラムデータが四散する。

これが、この世界における『死』の形。死体という痕跡は残る事なく、まるでそこに最初から何もなかつた様に跡形もなく消滅する。

「……ふう」

厄介な後衛を倒した所で一息吐くと、何時まで経つてもこの緊張感には慣れないなとサクヤは心の中で呟く。

こちらでの『身体』は酸素は必要ないし、心拍が激しくなる事も冷や汗をかく事もないが、きっと向こう 現実世界では激しく呼吸を繰り返し、心拍が加速し、手にはじつとり冷や汗をかいている事だろう。

このゲームを始めて早一年近くになるが、慣れないのは当然だ。今、サクヤが見ている全て 視界に映るHPバー や エネミー、薄暗い迷宮の通路の壁にかけられた松明等は全て仮想の3Dオブジェクトであり、現実には存在しない。

だが、それらが全て幻であろうと確かにサクヤと後方の少女が今、自分自身の命を賭けて戦っているという事実だけは真実だ。

そういう意味で言えば、この戦闘は不公平極まりない。なぜな

ら、目の前でサクヤを警戒した様子で大剣を構える人間は、見た目は確かに人間だが、決して本物の命は持っていない。何度も殺されても、時間が経てばシステムによつて再構成されるプログラムでしかない。

「おおおおっ！」

エネミーが凶太い如何にも男らしい雄叫びを上げてサクヤに向かつて行く。

それはもはや、自分が死んでもサクヤに一でもダメージを与えられればそれでいいという考えなのが見て取れた。

「……神風特攻、ね」

そんな防御を捨て、一直線に自分に向かつて来る姿を見て、サクヤは思わず呟く。

普通のMIMOであつたあの頃なら、それもありだつただろう。HPが全損して死んでも、また街からやり直せばいいのだから。だが、そんな仕様は当の昔になくなつた。もうこれはゲームだが遊びではない。真剣勝負なのだ。

だから、ここで死ぬ訳にはいかない。絶対に。

サクヤはソードマスターの渾身の斬撃を身体を半回転させるだけの最小限の動きで回避し、そのまま最大限の力を込めて蹴り飛ばす。その蹴りはソードマスターのHPバーを一割程度しか減少させなかつたが、その勢いで数メートル後方まで吹き飛んだのを確認すると、サクヤは後方の少女に向かつて叫んだ。

「フウカ！　トドメだ！」

「これで……終わりっ！　凍り付いて

《ツララ・エントランス

その一言と共に、ソードマスターの半径数メートルの気温が急激に低下し、ピキピキという音と共に足元からみるみるソードマスターの身体が凍り付いて行く。

「おおおおおおおおおおおおお！」

どんどん凍り付いて身動きが取れなくなつたソードマスターの断末魔。

やがて、完全に氷漬けにされて動きが止まつたのを確認したフウカが指をパチンと弾くと、その氷は一瞬で粉々に吹き飛び、その九割程残つていたHPバーを一瞬で全損させた。

視界の中央に真四角のウインドウと共に浮き上がつたドロップアイテムリストを一瞥して剣を腰の鞘に收めると、田の前に白い手と共に体力回復アイテムであるポーションではない、普通の水が入つたビンが差し出された。

淡い水色の長髪と同じ色のローブを身に纏つたウィザードの少女フウカは顔立ちこそ幼いが、そのローブを押し上げる豊かな膨らみだけは立派に女性を感じさせた。

「お疲れ様。お兄ちゃん」

「ああ。フウカもお疲れ」

「最後、ちょっと派手にやりすぎちゃつたかな……反省反省」

そう苦笑い気味に語るフウカは「ふああ……」と小さな欠伸を一つ。

視界右上に小さく表示された時刻表示は、すでに午前0時を指していた。

迷宮に潜つて既に三時間という長時間が経過している為、流石に回復ポーションも少なくなつてきているし無理は出来ない。それこ

そ無茶をして過労で気絶した所をエネミーに襲われて死ぬ事態だけは絶対に避けなければならない。

「……帰るか」  
「うん。 そうしよ」

フウカが頷いたのを確認して、ゆっくりと立ち上がる。

今日も無事、生き残る事が出来た。しかし、ねぐらに戻つて休息を取れば、すぐに次の戦いが訪れる。

このサイクルを繰り返していれば、死ぬ確率がゼロではない以上、いつかは確率論の問題で死神のカードを引き当てる事になるだろう。問題は、それを引き当てる前にこのゲームを無事にクリアする事が出来るか、という事だ。

迷宮の出口を目指して一人で歩を進めながら、サクヤはふとあの日の事を思い出していた。

今から約一年前。全ての原点となつたあの日を。

ミンミンと蝉の鳴き声が窓の外から聞こえて来る。時刻は既に午後七時になる所だがまだ外は明るく、まさに夏真つ盛りといった所だ。

部屋の主である男にしてはさうむらとした茶の短髪にやや中性的な顔立ちの少年、雀宮咲夜スミヤサカナが黒のTシャツに黒の短パンといった見るからに夏の部屋着という格好で自作した愛用の高スペックデスクトップの画面を食い入る様に見つめていると、じんじんと部屋の扉を叩かれる音がした。

こんな時間に咲夜の部屋を訪ねてくる人物は一人しかいない為、扉の向こうに聞こえる様な声で相手の名前を呼んだ。

「風花か？ 入つていいぞ」

直後、がちゃりと扉を開けて、ワイシャツに灰色のチェックスカートという咲夜と同じ茶色の髪を背中まで伸ばした制服姿の妹、雀宮風花スミヤフウカが部屋に入つて来た。

「ありやりや……バレてたか」

「そりやな。この家、今俺とお前しかいないし」

「ちとせさんがいるよ？」

「オゴジヨジやねえか」

言つてから一匹のオゴジヨの事が咲夜の脳裏に浮かぶ。

ちとせさんというのは、ある日風花が拾ってきたオゴジョの名前だ。何故か風花と母にだけは懐くが咲夜と父には懐かないという雄の習性がこれでもかという程押し出された性格な為、雀富家の男性

陣 咲夜と父からはとことん嫌われている。

だが、それとは反対に雀富家の女性陣 風花と母にはとことん好かれている為、下手に手出し出来ないという状況が続いて早一年。今となつてはそんな事よりも風花は一体何処でオゴジョを拾ってきたのかという事と、何で名前が『ちとせさん』なのかの方が重要な問題に感じられるくらいには落ち着いてきている。

ちなみに、両親は咲夜を産んでもう十七年、風花を産んで十四年経つというのに、未だに新婚の様なラブラブぶりでこの夏は風花に家事を任せて一人きりで旅行に行つてたりする。

咲夜は溜息を吐いて視線をディスプレイに戻すと、そのまま尋ねた。

「てかお前何で制服？」

「今日学校で夏期講習だったの。優等生としては参加しないとかんなーと」

「優等生さん、キャラ作りご苦労さん」

風花はどうやら学校では優等生キャラで通つてるらしく、そのキャラ作りは徹底されているの一言に尽きる。

当たり前だが宿題は絶対忘れず、予習復習は必ず毎日やる。

その毎日の積み重ねの結果、テストは毎回学年トップクラスで生徒会の副会長を務めてより良い学校にする為に奮闘している。

それでもまだ足りないのか、「何か頭良さそうじゃない?」という理由から伊達眼鏡までする始末だ。

更には勉強だけではなく小さい頃から兄である咲夜の友達に混ざつて運動していたせいか運動神経も抜群で、一年生になつた今でも部活動からの勧誘が後を絶たない程。

生徒会活動に影響するからと全て丁重にお断りしているのだが、それでもまだ運動部の大半が虎視眈々と狙い続けているらしい。

見てくれの通り、可愛らしい顔立ち、その歳に似合わぬ抜群のスタイルと容姿も美少女と呼ぶに相応しく、その上性格も優しくてしつかり者だというのだから当然告白もよくされるのだが、未だに新婚の様にラブラブの父と母に変な方向で似たのか咲夜と風花には既にシステムブラコンの包囲網が完成しており、毎回「お兄ちゃんの方がカツコいいからごめんなさい」と言つて、告白して来る男達をバツサリ斬り捨てている。

その話を聞いた時、咲夜は表面上は溜息を吐いていたが、内面では咲夜も何時か女の子から告白される日が来たら、「妹の方が可愛いからごめん」と言つてみようかなと考えていたりした。

そんな完璧優等生の妹である風花の特徴を並べてみると、容姿端麗成績優秀運動神経抜群家事万能と何かの暗号かと思える程だ。

世の中仲が悪い兄妹が多い中で、雀宮家は実に良好な兄妹関係が保てているのが、二人の密かな自慢だったりする。

「それで、何の用だ？」

「えっとね、夕飯出来たから呼びに来たの」

「後で食うから先食つてくれ」

ディスプレイから視線を外さずにひたすらページをスクロールしていく咲夜に風花は溜息を吐くと、

「……さつきから私の顔も見ないで一体何見てるの？　ＨＰサイト？」

「違うわアホ。これだよこれ」

風花は、手招きされて咲夜のデスクトップのディスプレイに表示された記事を覗き込む。

そこには『世界初！ VR技術を用いたMMORPG、ソードマギカ・オンライン（SMO）が正式発表！』といつ見出しで始まる紹介記事が開かれていた。

「ああ。何か凄いって二コースとかで話題の奴？ 本当、お兄ちゃんも好きだねえ」

「仕方ないだろ。好きなもんは好きなんだし」

「別に悪いなんて言つてないよ。お兄ちゃんが根つからのゲーマーなのは昔から知つてるし」

口を尖らせる咲夜をフォローしてベッドに腰掛けると、改めて兄の部屋を見渡した。

風花の女の子らしいぬいぐるみやファンシーで可愛らしい家具類でまとめられた部屋とは違い、所狭しとPCやプログラムの参考書等が置かれた飾り気のない部屋。

男の子の部屋って皆こんなものなのかなと一人納得してから、風花は答えがわかつていながらも尋ねた。

「ねえ、お兄ちゃん。やっぱりそれもプレイするの？」

「ああ。もちろんそのつもりだけじゃ」

そこで咲夜がはあ、と深い溜め息を吐いたのを見て風花は「あれ？」と小首を傾げた。

普段なら自称ネトゲ廃人を語る咲夜にその手の話を振れば、間違いないノリノリでそのゲームの魅力を語つて来るはずなのだが、初めて溜め息だけが返つて来る結果となつたのが意外なのだ。

「ど、どうしたの？ 何かあった？」

「いや……プレイしたいのはやまやまなんだけじゃ、この話題性だろ。プレイ出来そうになくなつて」

「あー……それは確かに」

今時珍しく、ニュースにも取り上げられるくらい話題のゲームなのだ。一般タイトルの様に簡単に手に入る訳がない。あまりそういう物には詳しくない風花には何がどう凄いのかは想像もつかないが、咲夜からすればそれこそ喉から手が出る程欲しいのは間違いないと確信出来た。

「お兄ちゃん。そのソードマギカ・オンラインって何が凄いの？」「ニュース見ても私にはよくわかんないんだけど」

「そうだな……風花はVRって知ってるか？」

「さつきVRでやってたから単語だけなら。Virtual Realityの略だって言つてた」

正解、と頷くと咲夜はPCを操作してソードマギカ・オンラインのティザーサイトを開いて見せた。

ティザーサイトとは、発売前の新製品に関する断片的な情報のみを公開し、閲覧者の興味を引くことを意図したプロモーション用Webサイトの事だ。断片的な情報つまり、ゲームの大まかなシステムや世界観なんかを紹介している為、そこを見れば大体どんなゲームなのかを掴める様になっている。

「VR……日本語に直すと仮想現実って言うんだけど、それってようするに、普通はないものを見るように見せる技術なんだ」

「つまり、どういう事？」

「キャラクターをコントローラーで操作するんじゃなくて、自分がキャラクターとして動いて剣振つて魔法使つたり出来るって事」

それを聞いて、今度こそ風花は「へえー！」と感心した声を上げた。

自分で剣や魔法を使って敵を倒す。ゲームをやれば誰もが一度は憧れる事がこのソードマギカ・オンラインでは出来るというのだ。

確かにそんな夢みたいな事が出来るなら、これだけ話題になるのも納得出来るだろう。

「はあ……ティザーサイトなんて見てたら余計に欲しくなるなあ」

咲夜が深い溜め息と同時にブラウザを閉じるのを見て、風花はズレにズレた話の軌道を修正すべく口を開く。

「じゃあお兄ちゃん、一段落した所でそろそろ」飯冷めちゃうから早く行け? 今日はちょっと自信作なんだから!」

「ああ。PC落としたらすぐ行くから先に行つてくれ

「うん。じゃあ先行つてるね」

風花はベッドから腰を上げて咲夜の部屋を後にして、真っ直ぐ一階のリビングには向かわずに隣にある自分の部屋の扉を開く。飾り気のない咲夜の部屋とは正反対の可愛らしくレイアウトされた部屋の中央に佇む小さな丸机の上に置かれた同じゲーム雑誌を二冊手に取る。

「……ソードマギカ・オンライン、か」

誰にでもなく呟く風花の視線は、雑誌の表紙に書かれた大文字に向けられていた。

『ソードマギカ・オンラインオープン テスト応募用紙』。そこにはそう巨大なフォントで目立つ様に書かれている。

帰りに寄った駅前の本屋でふと目に着いた雑誌に『ソードマギカ・オンラインオープン テスト応募用紙封入!』という表記を見た時、

風花は昔、咲夜と二人でゲームをしていた時の事を思い出した。

とても楽しくて充実した時間。もし、あの時間をまた過ごせたら

そう考えたら一冊手に取りレジへ向かっていた。

「……駄目元で送つてみよつかな」

また、兄妹でゲームが出来る事を願つて駄目元で挑戦してみるのも悪くないかなと考えながら、風花は部屋を出てリビングへ向かった。

そして、数日後の正午過ぎ。お昼ご飯の後片付けを済ませてクーラーの効いたリビングのソファに寝転がつてのんびりしていた所で、呼び鈴が鳴った。

「はーい」と返事をしてから重い腰を上げて玄関の扉を開くと、「お荷物お届けに上がりましたー」という男性配達員のテンプレート化した台詞が聞こえた。

「サインお願いします」と言う配達員の指示に従つて玄関に置かれた判子を取り出し、押そうとした所で宛先が雀宮咲夜、雀宮風花の一つになつている事に気づいて啞然としてしまう。

本当に当たつちゃつたよ。

風花は荷物を受け取つている最中、苦笑いしながらそんな事を考えていた。

駄目元で送つたにも関わらず、まさか一つ共当たつてしまつとは。これが兄を想う妹パワーだとでもいうのか、と一人で感心しながら荷物を持って咲夜の部屋に向かつ。

「お兄ちゃん、ちょっと開けてー」

「ああ。今開けるよ」

扉の向こうから咲夜の声が聞こえた数秒後、がちゃりと扉が開いた。

「どうしたって風花、どうしたんだその荷物……」

「話は今するから、とりあえずこれ、部屋の中置いてもいい?」

「あ、ああ」

事態が飲み込めていない様子で生返事する咲夜を気にも留めずに風花は「失礼しまーす」と軽い調子で口にしながら部屋に入ると、部屋の中央に小型のダンボール一つを置いてから定位置のベッドに腰を下ろす。

風花が腰を下ろしたのを見て、咲夜は部屋の中央に置かれたダンボールに視線を当てながら尋ねた。

「で、風花。何なんだこれは……」

「ふふん。聞いて驚いてよお兄ちゃん。この前話してたソードマギカ・オンラインのオープン テストね、一人分応募してみたらなんと一人分当たっちゃったの」

えっへん、と偉そうに胸を張る風花の言葉の意味が理解出来ずにしばらく啞然としていた咲夜は、数秒後ようやく我に返ると恐る恐る尋ねた。

「……マジで?」

「うさ。マジマジとか」

風花が頷くと、咲夜は「うおおおおー」と雄叫びを上げて風花を

勢い良く抱きしめた。

ええっ！？と顔を真っ赤にして慌てる風花の事等気にする事もなく、咲夜は身体でその感動を表現する。

「風花ありがとうー。まさか……まさかソードマギカ・オンラインのオープン を遊べるなんて……！ なんとお礼を言えばいいか……！」

「お、お兄ちゃん。お礼はいいから離れてくれないかな……流石に恥ずかしい……」

「つー わ、悪い」

咲夜がやつと自分のしている事に気付いて慌てて風花から離れた所で、風花は深呼吸して自分を落ち着かせてから本題に入った。

「そ、それでね、お兄ちゃん。代わりについて言つたら変だけど……また私と一緒にゲームしよ。……昔みたいに」

「…………！」

何時から兄妹でゲームをしなくなつたんだろうかと咲夜は思い返してみると、咲夜が中学二年になつた頃からだからもう一年になる。その頃には咲夜はもうネットゲームの虜になつていて、据え置きハードで遊ぶ事はほとんどなくなつていた。

ネットゲームをプレイしている咲夜は本当に楽しそうで、そんな兄の樂しみを邪魔出来ないと考えた風花は、今まで咲夜に何度も言って来た「一緒にゲームしよう」という言葉を言つ事をやめたのだ。兄の方がネットゲームの虜になつたのは簡単で、中学三年にもなるとそもそも受験等の理由でゲームをやつている人が極端に少なくなるのだ。

遊び相手がない据え置きハードよりも遊び相手がいるネットゲームに流れるのは当然と言える。とはいえ、咲夜は風花がいつもの

様に遊ぼうと言つて来ればいつでも応じるつもりでいた。

しかし、何時まで経つてもそんな気配は全くなかったので、風花も周りの連中と同じ様にゲームを卒業したのだと勝手に思い込んでいた。

だが、それは違つた。風花はゲームを卒業したのではなく、咲夜の邪魔をしない為に我慢していただけだつたのだ。

兄妹でまたゲームで遊びたい。

ただその一心だけでソードマギカ・オンラインのオープン テストに応募した。

こう考へれば、きっと凄い競争率だつたであるう数少ない枠を二通で一つ入手出来たのも納得出来る気がした。

「風花

「……何?」

「……一緒にゲーム、やるか

「……うんっ!」

風花が　妹が自分とゲームをしたいと思つてくれている。なら、兄としてその気持ちに応えない訳にはいかなかつた。

元よりやりたくて仕方なかつたゲームなのだ。それを風花とプレイ出来るんだからまさに一石二鳥。

咲夜は荷物の箱を開いて中から新品のソフトパッケージとネットレス型の小型機器を取り出すと、白い二ハイソックスに包まれた白くて細い足をぶらぶら揺らして上機嫌な様子の風花に机の上のPCを指差して言つた。

「俺は説明書とか全部読んで機器の準備するから、風花はそこのPCでソードマギカ・オンラインのティザーサイト見てお勉強してろよ

「いい。そんな事しないでも、きっとお兄ちゃんが教えてくれるも

「ん

「えへへ。だよねつ」

心を見透かされた様な言葉。

だが、咲夜はそれを否定する事は出来なかつた

。

「よし。じゃあ風花、これ着けろ」

二十分後。

機器の説明書を一通り読んで仕様を理解した咲夜は、二二二二二とご機嫌な笑顔を浮かべる風花にソードマギカ・オンラインのティザーサイトで学んだわかる限りの仕様を説明した後、ネックレス型の本体を手渡した。

『バーチャルエフェクター』。

それがこのソードマギカ・オンラインをプレイする上で必要になるハードの名前だ。

しかし、それは今まで発売されて来た据え置きハードとは根本的に異なる。

モニターとハードとコントローラーの三つが揃つて初めてプレイが出来た据え置きハードとは違い、バーチャルエフェクターはただ首に装着するだけでいい。

それだけでバーチャルエフェクターが放つ特殊な電波が脳に直接アクセスして常時ソードマギカ・オンラインのゲームサーバーと相互通信を行い続ける。

それによつてユーザーは現実世界でダイレクトに『えらぶ』情報 視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった情報を感じる事が出来るのだ。

二十一世紀初頭に開発された空気中の窒素で自動的に発電を行うバッテリーのおかげで計算上は充電なしでも一年程度までなら稼動

し続けていられるとの事でバッテリーの心配もいらない。

後は、好きなタイミングで『ゲーム・スタート』と唱えればソードマギカ・オンラインの世界に到着という訳だ。

「……うん。準備おつけだよ、お兄ちゃん」

「よし、じゃあ俺に続いて唱えろよ？『ゲーム・スタート』！」

「『ゲーム・スタート』！」

咲夜に習つて魔法の言葉を唱えると、風花の意識は急激に遠ざかつて行つた。

「つー？」

次に咲夜が目覚めたのは真っ暗で何もない空間だった。

見渡す限り広がる黒。物は何一つない完全なる無の空間。起動に失敗でもしたのかと思ったが、直後に現れた真四角の仮想ウインドウがそうではない事を物語ついていた。

ソードマギカ・オンラインの世界へようこそーーまずはキャラクターメイキングを開始してください。

機械的なシステムボイスと共に仮想ウインドウにボクサーパンツ一丁の咲夜の身体が現れた。

これは今頃風花大慌てだろうなと一人思考しながら試しに髪の部分を触つてみると、色相環を描くカラーパレットが出現した。

恐らく、これで髪の色を変えるのだろうと判断した咲夜は、数ある色達の中から漆黒と呼ぶに相応しいこの空間と同じ黒を選択し、自らの茶色の髪を黒に染め上げる。

後は肌の色や瞳の色等も変えられるみたいだが、肌はこのままの肌色でいいし、瞳も元より黒なので髪色に合つていて特に変える必要がなかった。そして、最後にプレイヤーネームを『Sakuya』と設定してOKボタンを押す。

最後に、職業を選択してください。

再び、システムボイスと共に目の前に一つの仮想ウインドウが現れる。右側には『ソードマスター』、左側には『ウィザード』と書かれた中で咲夜は迷わず右側を選択した。

このソードマギカ・オンラインにおける職業は一つ。剣を中心とするソードマスターか、魔法を中心とするウィザードのどちらかを選択する事となる。

咲夜は元から後方で離れて魔法を使って戦う戦い方があまり好きではなく、昔風花と二人でプレイしたRPGでは必ず咲夜は剣士、風花は魔法使いを操作していた。

その事から考えてもまず間違いなく風花はウィザードを選ぶだろうし、ウィザード一人のP.T.<sup>パーティ</sup>はあまりバランスが良くない為効率が良くないという事からもソードマスター一択と考えていた。

以上でキャラクターメイキングは終了となります。ソードマギカ・オンラインの世界をお楽しみください！

システムボイスがそう告げた所で目の前に虹の輪で出来たゲートが出現する。

ここを潜れば、ついに念願のソードマギカ・オンラインの世界に降り立つ事が出来る。そう考えるとワクワクが止まらない。

「よし！ 行くか！」

咲夜は意氣込んで力強い一步と共にゲートを潜つて行つた。

ゲートを潜ると、最初にがやがやと街の雑踏が耳に入つて來た。そのリアルな聴覚情報にやや驚きながらも辺りを見渡すと、そこには非現実的な世界が広がっていた。

視界の右上には現在のエリア情報と時刻が表示されており、そこには貿易都市アイティモール。そう書かれていた。

白を基調とした煉瓦作りの街並みの各所では商人NPC達が露店を出して街を歩くプレイヤー達に声をかけていく。

ティザーサイトの情報によれば、このソードマギカ・オンラインの舞台となる世界、『プリステイア・リュミレス』に存在するこの、貿易都市アイティモールを含めた三大都市には『フリーマーケットエリア』なるものが存在しており、そこではプレイヤーが自分で店を開き、アイテムを販売する事が出来るとの事だった。モンスターからドロップする武器や防具を強化したりする素材アイテムや稀にドロップされるレアドロップの装備類は商人NPCが販売しない為、ユーモア間で品物の売買が出来るという事だ。

咲夜としては今すぐ行ってみたい所だが、風花を置いて行く訳にはいかないという兄としての自尊心からそれはまたの機会にする事にした。

流石貿易都市というだけの事はあり、海に面している為心地良い潮風が咲夜のさらさらとしたショートカットを揺らしていく。

この心地良い潮風の感触と匂い、街並みの雑踏も全て仮想の情報だというのだから、本当にVR技術は凄いなと感心してしまつ。こんな素晴らしい感覚を味わってくれた風花には今度何か奢らなけ

ればなるまいと考えていると、街の中央に位置する巨大な女神の銅像

所謂HPバーがゼロになつた時に街に戻される場所である復活ポイントに見覚えのある顔の少女が淡い光と共に降り立つた。

きょろきょろと周囲を拳動不審に見回す淡い水色の髪を潮風に靡かせる少女の頭上には『Fukia』とプレイヤーネームが表示されており、間違いなく自分の妹であると確信した咲夜はその少女に近寄つて声をかけた。

「よ、遅かつたな」

「お兄ちゃん!」

不安そうな表情から一変、ぱあっと男達を魅了する可愛らしい笑顔で咲夜に駆け寄る風花に周りにいたプレイヤー達は「お兄ちゃん?」と首を傾げて二人に注目した。

そもそも、MMORPGというジャンル自体、男性プレイヤーに比べて女性プレイヤーが圧倒的に少ない為嫌でも注目の的になると、うのに、大声で兄妹関係を暴露されでは注目を集めて当然といえる。

「あのな……フウカ。こにはもうゲームの世界なんだから、プレイ

ヤーネームで呼べって」

「え、あ、うん。えっと……サ、サク……あううー! やっぱり無理! 名前なんて恥ずかしくて呼べないー!」

頑張つてはみたものの、どうしても生まれてから十四年、ずっと『お兄ちゃん』と呼んで来ているのにいきなり名前で呼ぶ事は風花の羞恥心と乙女心が許さなかつたらしい。

だが、それが返つて注目を集める結果となり、「何あの可愛い妹」「俺、ああいう子と結婚したいなあ」「あの兄、PKしてやろうかな」と野次馬達が話しているのを聞いてしまつたサクやはこれ

以上ここに留まるのはまずいと判断し、顔を真っ赤にして悶えるフウカの手を少し強引に握つて急ぎ足でその場を後にする。

「お、お兄ちや……サ、サクヤと手繋いで……あうう～！」  
「もういいから！ 今まで通りの呼び方でいいから早く元に戻つてくれ！」

フウカが落ち着きを取り戻したのは、五分後の事だった。

フウカが落ち着いたのを見て、一人はアイティモールの街の北側にある巨大な建物を訪れていた。

#### 『統制機構』。

この世界のソードマスター や ウィザード を統括する機関で、この世界に降り立つたプレイヤーはまずここに向かう必要があった。NPC や 統制機構からの依頼といつた冒険を受ける場所でもあるここでプレイヤーは最初に統制機構に登録を済ませてチュートリアルを受けるのが基本となっているからだ。

「ふわあ……お兄ちゃん、凄い人だね」

視界を埋め尽くす無数のプレイヤー達を見て感動した様に呟くフウカにサクヤは無言で頷いた。

流石にコースで取り上げられる程話題性の高いソードマギカ・オンラインのオープン テストともなれば、ログイン人数が尋常ではない。

とはいっても所詮はNPCと会話をしてチュートリアルを受けるだけ。現実世界の様に手続きに時間がかかるなんて事はない。

とはいっても所詮はNPCと会話をしてチュートリアルを受けるだけ。現実世界の様に手続きに時間がかかるなんて事はない。

はない為、すぐに二人の番が回ってきた。

「ようこそ、統制機構へ。サクヤ様はソードマスター、フウカ様は  
ウェザードですね。ではまずこちらをお受け取りください」

受付の女性NPCにサクヤは平凡な長剣と鎧を、フウカは先端に水晶の着いた杖<sup>ウォンド</sup>とロープを受け取ると、《目の前にチュートリアル》を受けますか?》というウインドウが表示された。

普段ならチュートリアルは受けずにやつて覚えるタイプのサクヤだが、横に立つフウカが不安そうにこちらを上目遣いで見上げてきたのを見て、はいと書かれたウインドウをタッチする。  
ありがと、と小さく呟いてフウカもウインドウをタッチすると、一人の視界が暗転し、次の瞬間には草原に立っていた。

「では、まずはメニューから装備を選択してください」

見渡す限り広がる草原。空は綺麗な青空が広がる空間に不釣合いなシステムボイスが響く。

視界右側に表示されたメニューボタンをタッチするとメニュー一覧が開き、そこには上から順に《ステータス》、《装備》、《アイテム》、《スキル》、《フレンド》、《パーティ》、《クエスト》、《ギルド》、《ログアウト》の計九個の項目が表示されている。

その中の装備をタッチして装備ウインドウを開くと、ウインドウ右側に身体のシルエットが表示され、左に装備品情報が表示された。今はサクヤは《はじめての剣》、《はじめての鎧》を装備しており、フウカは《はじめての杖》、《はじめてのロープ》を装備している。

「次に、武器と鎧の部分をタッチして装備を変更してください」

サクヤがシステムボイスの言つ通りに武器をタッチすると、その横に現在持っている武器と現在装備している武器の情報が表示された。

現在の装備は攻撃力が8しかないのだが、何と先程貰つた《初心者の剣》は攻撃力が34もあり、その上昇振りにサクヤは驚きを隠せなかつたが、そのまま決定して初心者の剣を装備する。

全く同じ要領で鎧も装備すると、防御力が9から36まで上昇した。先程までの鎧というより服であつたものに比べて、いかにも初期装備らしいアーマーを身につけた事で装備のおかげであるにも関わらず、サクヤは自分が何処か強くなつた様な感覚を感じていた。

フウカも茶色の古めかしいローブから純白の清純さを感じさせるローブへ装備を変更した所で田の前にサンドバック用のかかしが出現した。

「では、好きにかかしを攻撃してみてください。やめたくなつたらやめると言つてください」

「じゃ、遠慮なく……はあっ！」

躊躇なく腰の剣を抜いてかかしに斬りかかるが、その頭上に表示されたかかし《レベル1》のHPバーは一ドットを残して減少を停止した。

「残つたか……なら、これでトドメだッ！」

偶然と信じてもう一度斬りかかり、今度こそゼロになると信じていたHPバーは一ドットも減少しなかつた。

そこから何度も何度も斬り続けたが、HPバーは減少しなかつた。

「な、何でだ……？ 何で倒せないんだ？」

「お兄ちゃん、もうやめよう？ ね？」

「わかったよ……やめんなー！」

フウカに諭されて渋々とそう叫ぶと、再びシステムボイスが響き渡つた。

「では、次はスキルを使ってみましょう。メニューからスキルを選んでください」

システムボイスに従つてメニューからスキルを選択すると、そこには一つだけスキルが表示されていた。

サクヤには光属性魔法と融合した斬撃攻撃を放つソードマギカ、《クレセント・スラッシュ》。フウカにはRPGの定番中の定番である魔法、《ファイア》。

「このソードマギカ・オンラインではエネミーはスキルを使わなくては倒す事が出来ません」

その説明を聞いて、サクヤはようやく自分がいくら攻撃してもかかしを倒せなかつた理由を理解した。

スキルでしか倒せないとシステム上で設定されているのであれば、どんなに頑張つても通常攻撃で倒せる訳がない。

「まずは炎属性の初級攻撃魔法である《ファイア》を発動してみましそう。また、魔法に限らずスキルは全て画面左上にある緑の横線MPバーを消費する事で発動するので、残量には気をつけましょ

う」「は、はい！」

システムボイスに律儀に返事するフウカにサクヤは吹き出しそうになるが、吹き出したら後が怖い為何とか堪える。

「スキルウインドウに表示された詠唱文を唱えた後、その魔法の名前を叫ぶ事で魔法が発動します。では、《ファイア》でかかしを攻撃してみてください」

「は、はい！ 見ててね、お兄ちゃん」

「ああ。頑張れ」

サクヤに励まされて意氣込んだフウカは、深呼吸して自分を落ち着かせると小さくその言葉を口ずさみ、その名前を叫ぶ。

「《ファイア》！」

直後、その杖から放たれた火炎の球がかかしに直撃し、鉄壁の壁であつたわずか一ドットのHPバーが消滅。その身体を形作るプログラムデータが四散する。

画面越しには幾度となく見て来た魔法だが、生で見ると凄い迫力であつたそれに驚きを隠せないサクヤに、フウカはしばらく唖然とした後一気にその表情を明るくしてサクヤに抱き付いた。

「やつたあ！ 私やつたよ、お兄ちゃん！」

「お、おいフウカ！ 胸当たつてるから離れろつて！」

「はつづー？ 『』、『』めん！ 興奮しちゃつてつい……」

兄妹だからこそ言える直球過ぎる一言にフウカは瞬時に顔を真っ赤にしてサクヤから離れる。

とはいえ喜ぶ気持ちもわかる為、サクヤは顔を真っ赤にして俯くフウカの頭に手を置いて撫でてやる。

「あ……」

「やつたなフウカ。後タイミング逃してたけど、その水色の髪と瞳、

似合つてゐるぞ」

「え、えつとその……ありがと。お兄ちゃんも黒髪似合つてゐる……  
よ？ え、えへへ……」「……」

照れた様子ではにかむフウカの頭をもう一度撫でた後、再び出現ボップしたかかしに腰から抜いた剣を向ける。

「今度は俺の番だ。フウカ、見てろよ  
「うん。お兄ちゃん、頑張つてね！」

フウカの声援を受けて剣を構えた所でシステムボイスが再び空間に響き渡る。

「では、攻撃対象に集中して《クレセント・スラッシュ》をイメージしてください」

システムボイスの言つ通りにサクヤは目の前のかかしに意識を集中して剣を握る右手に力を込める。  
すると、剣の刀身が淡いライトエフェクトを発生させ始めた直後、サクヤはスキル名を口にする。

「《クレセント・スラッシュ》！」

直後、サクヤの身体が操られているかの様に勝手に動き、そのかかしを三日月状の太刀筋で両断する。

刀身のライトエフェクトが消え、サクヤが剣を鞘に収めて息を吐いた所でフウカはサクヤに駆け寄った。

「お兄ちゃんすっごくカッコよかつたよ！ もう何かずばーんつ！ すぱーんつ！ って感じで！ 流石私の大好きなお兄ちゃんんだね

！」

「ありがとな、フウカ。さっきのお前も凄く力ッコよかつたぞ。流石俺の妹って感じだ」

「えへへ……ありがと、お兄ちゃん」

猫の様に目を細めて成すがままにフウカが頭を撫でられていた所でシステムボイスが響き渡る。

「では、バイソンを倒してみましょう」

直後、目の前に一体の猪が出現した。  
エネミーの頭上に浮かぶウインドウには淡い赤のフォントでバイソン『レベル5』と書かれている。

サクヤ達を敵と認識したバイソンが咆哮し、その咆哮に驚いたフウカが「ひうつ！」と小さく悲鳴を上げる。

「落ち着けフウカ。俺があいつを足止めするから、お前は魔法でいいを倒せ。いいな？」  
「う、うん……わかった」  
「よし、じゃあ行くぞ！」

そう言つてサクヤが剣を抜き、フウカが後ろに下がった所でバイソンはサクヤに突進していく。

それをサクヤは回避すると、バイソンの動きが止まつたのを見て力一杯斬りかかる。その攻撃で三割程減少したHPバーを一瞥した所で、バイソンは身体を振り回す様にしてサクヤを跳ね飛ばす。すぐに起き上がってから自分のHPバーを確認すると、最大値で250あるHPが二十程減少していた。

ソードマスターは前衛を主とするだけあって、HPと防御力がウイザードより遥かに高い。

実際、フウカのHPはサクヤの半分以下 120しかないし、  
防御力も22しかない。だが、代わりに魔法防御がソードマスター  
のサクヤより遥かに高い為、ある意味イーブンを保てているのかも  
しない。

「《ファイア》！」

詠唱が完了し、火炎の球を放つ。だが、それはバイソンのHPバー  
を僅かに二割程度残し、サクヤからフウカへ攻撃対象を切り替え  
たバイソンが攻撃の準備を開始する。

だが、そこにライトエフェクトを剣に発生させたサクヤが飛び込  
み

「《クレセント・スラッシュ》！」

一閃。

残り一割のHPバーを一ドットも残らず奪い取り、バイソンの身  
体を四散させる。

直後、目の前のウィンドウにドロップアイテムリストと《レベル  
アップしました！》という表記。

それを一瞥してフウカの元へ行くと、どちらからでもなくハイタ  
ッチを交わす。

「お疲れ、フウカ」

「お疲れ様、お兄ちゃん！」

「お疲れ様です。最後に、レベルアップについて説明します。ステ  
ータス画面を開いてください」

お互いの功績を労つた所でシステムボイスが響き渡り、何も言わ  
ずにステータス画面を開く。

H PとM Pが先程より上昇しているのが見受けられたが、今は気にせずその下にあるステータス 上から物理攻撃力、魔法攻撃力、物理防御力、魔法防御力、移動速度と五個の項目が表記されている。その横には1・2・3と数字が割り振られており、フウカとサクヤはその数字の割り振りが全く異なっていた。

「レベルアップすると、レベルアップポイントが入手出来ます。今回は3ありますので、それを自分の好きなステータスに割り振る事でステータスを上げる事が出来ます。能力アップに必要なポイントはステータスの横に書かれたポイントで、ソードマスターはATK、DEFが上げやすく、ウィザードはINT、MRが上げやすくなっています。また、DEFは何もしなくてもダメージを軽減しますが、MRは魔法防御力だけでなく、防御魔法の性能も向上させる効果を持っています」

確かに、サクヤはATK・DEFは1ポイントなのに対して、INT・MRは3ポイントになっている。見ればフウカはINT・MRが1ポイントだが、ATK・DEFが3ポイントになっている。共通してSPは2らしい。

つまり、ソードマスターは剣を、ウィザードは魔法を極めるという事だろうとサクヤは解釈すると、ATKを2、DEFを1上昇させる。それを見てフウカは少し考えた後、INTを3ポイント全振りした。

「お前、防御ガン無視だな……」

「お兄ちゃんなら私の事絶対守ってくれるだろうし、序盤は攻撃力高い方がいいかなーって」

「善処させて頂きますよ、お嬢様」

兄を完全に信じきった様子で言うフウカに執事の真似をして答え

るど、システムボイスが話を終わらせる。

「では、これでチュートリアルは終了となります。そちらの出口からお戻りください」

そう言った所で光の球体が目の前に出現する。

恐らく、これに触れれば戻れるのだろうと直感的に理解すると、フウカはサクヤの手を握つて言った。

「戻るっか」

それに無言で頷くと、一人は光の球体に触れ、この空間から姿を消した。

チュー・トリアルを終えた二人は最初に持っていたゲーム内通貨1500セイルで買えるだけのHP、MP回復ポーションを商人NPCから購入すると、街の西側に位置する門からフィールドにてパーティ狩りを開始した。

アイティモール付近はサクヤ達と同じ低レベルのコーナーで溢れていた為、コーナーの集まっている場所より少し遠くで通常よりややレベルが高めのブルーバイソン等のエネミーを狩り続け、陽が落ちる頃には一人のレベルは5まで上昇していた。

ソロプレイと比べるとやや効率の悪いPT狩りで日暮れまでにここまで成果が上げられたのはやはり、フウカの魔法の攻撃力のおかげもあるだろう。

前衛でサクヤがエネミー相手に暴れ、フウカが後方から魔法で援護する。この形が出来てからエネミーとの戦闘は比較的短い時間で終了し、ソロに比べて足りない経験値量を数で補う事が出来た訳だ。無事に街まで戻つて来るとフウカはんー、と身体を伸ばしてサクヤに笑顔で語りかけた。

「あー楽しかった！ 私とお兄ちゃんの兄妹パワー 最強！」

「こり、調子に乗るな。あんなの有名なRPG的に言えばまだドラキーとかそんなぐらいいのレベルだぞ」

「はーい」

てへへ、と小さく舌を出すフウカに溜息を吐いてからサクヤは仮

想ウインドウを操作し始める。

そして、アイテム欄からエネミーのドロップアイテムを数点リストにしてフウカにトレード申請を出した。

「ほら。これ、フウカの取り分」

「……いいの？ これ、お兄ちゃんが手に入れたアイテムだよ？」

「いいから受け取れって。」うこうのは半分個だ

「う、うん。ありがと、お兄ちゃん」

フウカがトレード申請を受諾すると、サクヤは満足そうに頷いた。フウカは自らの頬が少し朱に染まっている事に夕焼けのおかげで気付かれなかつた事に安堵してほつと一息吐くと、現在の時刻を確認する。

現在午後五時半を少し過ぎた所。そろそろ夕飯の仕度をしたい時間だ。

「お兄ちゃん、私そろそろ夕飯の仕度するからログアウトするね」「おう。じゃあ、キリもいいし俺も落ちるかな」

長時間の狩りでそろそろ疲れを感じて来ているのもあつたので、頃合いだとサクヤもフウカに続いてメニューを開いてメニュー下のログアウトボタンを押す。

だが直後、《システムにエラーが発生した為、ログアウト出来ません》と書かれた警告ウインドウが目の前に出現した。

「あれ……お兄ちゃん、ログアウト出来ないよ？」

「……バグか……？ にしたってこんなデカ過ぎるバグ、普通ありえないだろ……」「やうなの？」

MMOについては全くの素人であるフウカが小首を傾げると、サクヤはそれに頷いて、

「ああ。普通バグってのはゲーム上有り得ない状態……例えば最初から最上級魔法が使えるだとか、工ネミーや街のグラフィックがかしい、ステータス数値が全て最高値みたいな異常とかそういう不具合を指す場合が多いんだ。ログアウト出来ないなんて致命的過ぎるバグはまさに前代未聞だよ。多分今頃、ゲームマスターにユーチューバーからガンガンメール飛ばされてるんじゃないかな」

ディスプレイ越しに遊ぶ通常のMMOであればログアウト出来ないというありえないバグが起こったとしてもランチャー自体を終了してしまえばいいが、自らの意識をゲームの世界にフルダイブさせるというソードマギカ・オンラインではそうはいかない。

ログアウトするにはゲーム内でメニューからログアウトを選択して脳とゲームサーバーとの同期を終了しなければならない為、この問題が改善されない限りユーチューバーは永久に向こう側に戻る事が出来ない。

MMOの世界には現実世界での生活を捨ててゲームの世界に生きる『廃人』、あるいは『廃神』と呼ばれる人間が極少数存在するが、基本的にユーザーの大半は現実世界での生活の暇潰しとしてゲームを遊んでいるのでこういった不具合は本来断じてあってはならない事だ。

「んー……よくわかんないけど、とりあえず待つてれば直るって事?

「……まあ、要約すればな」

「じゃあ、それまで街見て回ろうよ。私ね、ポーション買いに行つた時に偶然見つけたカフェに入つてみたいんだ!」

ログアウト出来ないとわかるやすぐに街観光に意識を切り替えた  
お気楽思考の妹を大物だと評価してから、サクヤが前方で早く早く  
と手を振つて急かすフウカの後を追いかけようとすると

「やあ、ユーモーの諸君。急で悪いが今、この瞬間からこのゲーム  
は我々『レガディータ』が支配した」

街に、悪魔の声が響き渡つた。

その何者かもわからぬ声が街中に響き渡り、「おい、どういう事だ」、「レガジィータつて何?」と街の各所から混乱した様子のユーナー達の声が上がりだした時、ユーナーの一人が「お、おい!空見ろよ!」と空を指差して叫んだ。

その声に釣られてフウカとサクヤが空を見上げると、そこには異様な光景が広がっていた。

先程まであつた綺麗な夕焼け空は跡形もなく消滅し、代わりに混沌とした紫色の空が広がっている。

そして、上空百メートル程の地点に映像が映し出された。

そこには仮面を被り、黒いフード着きローブを纏った人間五人が映つており、その背後には何かの機械が所狭しと並べられた景色と

「し、死体……!?」

そう。身体から血を流し、地面に突つ伏したままピクリとも動かない大人達が映し出されていた。

フウカは咄嗟にサクヤがその小さく華奢な身体を抱き締めて視界を封じた為直接その光景を見る事はなかつたが、他のユーナー達の悲痛な叫び声や悲鳴から何が映し出されているのかわかつてしまい、顔面を蒼白にした。

「お、お兄ちゃん……やだよ、怖いよ……！」

「大丈夫だフウカ。絶対に俺から離れるなよ」

「うん……」

泣きそうな表情で声を絞り出すフウカにサクヤがそう言い聞かせて抱き締める力を強くすると、より強く抱き締め返す形で返事が返つて来た。

こんな状況の中でも周りに比べれば比較的冷静なサクヤだつたが、それは妹の前で慌てた姿は見せられないという兄としての威厳からであつて、内心では今すぐ叫びだしたいくらい混乱しているというのだ。

それを今、兄が冷静である為に落ち着いているフウカに見破られはしないかと心配していたが、普段ならいざ知らず、この状況においては杞憂だつたらしい事に内心安堵する。

「さて、諸君。この状況を見てわかると思うが、我々は今、このソードマギカ・オンラインの運営元であるネクサスを乗っ取る事に成功して、ゲームサーバーの前にいる。つまり、このゲームを今プレイしている一万八千五百七十二人の命は我々が握っているという訳だ」

この言葉を要約すると、こういう事だ。

お前達は自分達が好きな時に殺せるんだぞ、と。

しかし、一体どうやって殺すというのだろうか。ゲームサーバーをいくら弄った所で人を殺せるはずがないのだが……

そんな事をサクヤが思案していると、その疑問に先程から話している中心の人間が答えた。

「諸君は思つてているだろ?。ゲームサーバーで人を殺せるはずがない、と。だが、その考えは間違いだ。君達の脳は今、バーチャルエフェクターを通してゲームサーバーと相互接続されている。だが、

君達の意識は今、君達の身体にいるのではない。このゲームサーバーの中にいるのだよ。データ化されて、ね。ゲームサーバーを破壊すれば君達の意識は永久に闇へと葬られ、事実上死亡する事となるだろ？

「……そ、そんな事出来る訳ない……！ そ、そうだよね、お兄ちゃん

後半はもはや主張といいつつ懇願。

食い入る様にフウカに凝視されるか、サクヤはそれに同意の領きを返す事が出来なかつた。

サクヤ達が本当にデータ化されているのであれば、サーバーが破壊されればデータは全損し、サクヤ達の意識も同じく消滅する事となるだろつ。

「言つておべが、これは嘘や脅しではない。公平なゲームだ。我々

「ふ、ふざけるなー。そんなの信じられるか」のテロリスト共。」

「そうだ、そうだ！」と便乗して呟く一部のゴーザー達の言つ事は  
最もだ。

あのレガジィータは運営元であるネクサスの社員を殺害してこのゲームを乗っ取り、ゲームサーバーを壊せば死ぬと脅しまでかけて来ているのだから、そんな犯罪者の言葉を信じる事が出来る人間等いるはずがない。

「君達が信じる信じないは勝手だが、我々はそうした物理的手段に出る事はない。君達が死ぬ条件は三つ。一つ目はＨＰを全損し、ゲームオーバーになった時。二つ目はバー・チャルエフェクターの電源が切れて通信が切断された時。そして三つ目はこちら側のゲームバーが破壊された時だ。まあ、二つ目と三つ目に関しては既にマ

ス「ミ」に大々的に報道されているから心配する必要はない。とはいっても、これはゲームだ。公平でなければならぬ。このゲームにおける君達の勝利条件は

わざかな間。

「この世界の中心に位置する《世界樹》の頂上にある《楽園》に到達し、魔物を封印してこのゲームをクリアする事だ。そうすれば君達を解放する事を誓おう」

このソードマギカ・オンラインの世界觀は、太古の昔に勇者の手によって封印された魔物の王が復活して世界樹の頂上にある《楽園》に侵入して魔物の封印を解いた為、世界に魔物が溢れる事となり、それをプレイヤーは再び封印に向かう、という事になっている。

「お、おこちよつと待てよ！ 世界樹は全部で百階層あるんだぞ！  
？ クリアまで一体どれだけかかると思ってるんだ！」

「そうだそうだ！ 僕達を馬鹿にするのもいい加減にしそう！」

一人が慌てた様子で発した言葉に便乗したコーラー達がまくし立てる。

サクヤとしてもその情報はティザーサイトで知っている為、特に驚く事はないが、その声が言っている事が本当だとすれば、一体何時までかかる事か……。下手をすれば三、四年かかるかもおかしくない。

「馬鹿になどしていない。攻略しないのであれば、それで結構。ただし、一度と向こう側に戻る事は出来んがね」

その声に、文句を言っていたコーラー達が一斉に黙る。

一生この世界で暮らす事になるかもしれない。下手をすれば、死ぬ事だつてありえる。

その精神的プレッシャーから街の各所では田の前の事実から田を背けて必死に否定しようとするコーナーの悲鳴が聞こえてくる。

「なあ、我々もこのゲームにボスとして参加する。もちろん、システムを利用した卑怯な真似は行わない。これはゲームなのだよ。我々と君達、どちらが勝つかの文字通り命を懸けた真剣勝負をしようじゃないか」

「ふざ……けるな……！」

楽しそうに語る声に、サクヤは拳を握り締めて搾り出す様な声で呟いた後、ついに鋭い叫び声を迸らせた。

「ふざけるな！ 」んなのはゲームじゃない！ こんなログアウトも出来ない命懸けの状況で暢気にゲームを遊べっていうのか！？」

サクヤは上空に映し出された映像の人間達を睨み付け、尚も叫んだ。

「お前らは一体何がしたいんだ！」

その叫びに答えるかの様に、中央の人間が口を開いた。

「さつきから言つてる通り、君達と真剣勝負がしたいのさ。命を懸けた、ね。今後HPがゼロになつた瞬間、アバターは四散し君達は死ぬ。これは決定事項なのさ。さあ

わざかな間。

「ゲームを始めよつか

最後の一言が、わずかな残響を引き、消えた

。

† 6 † (後書き)

とこう訳で、今年最後の投稿になります。  
来年もよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8800z/>

---

ソードマギカオンライン

2011年12月31日22時50分発行